



ここにいます
「がん電話情報センター」
あなたの知るを助けます

ancer

(全国一律の電話料金でご利用いただけます。
PHS、一部のIP電話からはご利用いただけません。)

おーここにじょうほう
0570-055224
受付時間：平日 12:00~17:00
(土日・祝祭日・年末年始・夏期休業を除く)

テレビが無い生活に入って4年くらいになるだろうか。
思う処があって、ではなく、テレビが壊れた・捨てた・そのまま買う機会がないままこの生活になった、とどうもだが。
それからラジオ生活になって、なにより目が楽になって良かった。私がテレビで苦手だったことに(その後)気づいたのは、画面の下に流れるテロップだった。画面は一瞬にして大量の情報を見せている。どんな場所で、人が何人いて、年齢(おおよそ)、性別(これもややおおよそ)、どのようなシチュエーションか、全てわかってしまう。その上、文字情報まで流す。視聴者には、登場者の方言の妙、言いよごんだり、言い直しをしたの...、と(どうも)をゆっくり噛み締めて理解する、という機会がないのだ。

「伝説のおばさん」のオススメ 5

想像力の翼を広げる私の「ラジオ生活」

Akiko Hashimoto



NPO法人血液情報広場・つばさ理事長、
がん電話情報センターCTIS相談主任、
日本骨髄バンク(骨髄移植推進財団)常任理事

橋本 明子

ラジオは声と音だけなので、私の想像力をたっぷり刺激してくれる。昔「丁目一番地」というラジオドラマがあった。父のひざで聴いた。あの丁目一番地は、私の思い出の中にだけある街角なのだ。そして、聴いていた日本中の人々の中に、それぞれの街角が描かれて残ったはずだ。
いま「聴く」仕事をしているが、ただ黙って耳を傾けているわけではない。的確に頷き、言葉かけができるかどうかで、話す人が心おきなく充分に語れるか否か分かれてしまう。つまり「聴く力量」が問われるのだが、話す人の息遣い、詰まった声などから想像力を駆使できるかがその「力量」となる。
『赤毛のアン』にも繰り返し出てくる「人たいていせつなのは想像力」。私にとってだけかもしれないが、テロップを流されることで辛かったのは「想像力を駆使することを奪われる瞬間」だったのだ。
もしテレビの受像機に「テロップが嫌な人は消せる」という装置が付いたら、買うかもしれない。こんなに進んだ世の中、できないことではないのでは？